

ケーススタディ②※第4回勉強会発表概要

「看取りから1年後、ご家族の手紙を通して気がつくことができた自分達のケアの価値」

村岡亜紀（東京大学医学部附属病院 A13 階北病棟看護師長）

発表者：藤縄 遥（臨床経験年数4年）

医療の高度化・複雑化が進む中、チーム医療の推進がより一層求められている。当院でも様々な専門チームが病棟スタッフと協働し、より良い医療・看護の提供を目指している。

当病棟は内科系混合病棟であり、緩和ケアや退院支援を必要とする患者さんも多いことから、緩和ケアチームや地域医療連携部等の多職種との連携を密に行っている。また退院支援カンファレンス、倫理カンファレンス、NST カンファレンス等の多職種によるカンファレンスも定着している。

本事例では、病棟看護師が患者 A さんの呼吸困難感緩和に向けて緩和ケアチームとともに関わったこと、A さんの「自宅に帰りたい」という思いを叶えるために、地域医療連携部、理学療法士、栄養サポートチーム等の多職種と連携し、退院支援に取り組んだこと、その後病状悪化のため退院できずに病院で看取り、家族とエンゼルケアを行ったことを報告する。

担当看護師は多職種と連携し懸命にケアを提供したにも関わらず、自宅に帰してあげられなかったという結果を重視するあまり、自身の看護の関わりのプロセスを肯定的に受け止めることができずに1年が経過した。そのような中、今回Aさんのご家族より担当看護師へ感謝のお手紙をいただいた。お手紙には、終末期から看取りまでの担当看護師の関わりへの感謝の気持ちが綴られていた。担当看護師はこの手紙を契機に本事例への関わりを改めて客観的に振り返り、自身が行った看護の関わりを肯定的に捉えることができた。

当病棟の看護師は、「丁寧なケア」「患者の思いに寄り添う細やかな対応」を強みとしている。個々の看護師の看護実践が可視化でき実感できるよう、今年度は「看護の見える化」をテーマに取り組んできた。今回いただいたお手紙によりご家族の思いを知ることができ、自分達の行ったケアの価値に改めて気づくことができた。まさに看護の見える化を実感した関わりであった。

※発表用パワーポイントは添付資料⑦参照